



虫の目、鳥の目通信 第17号

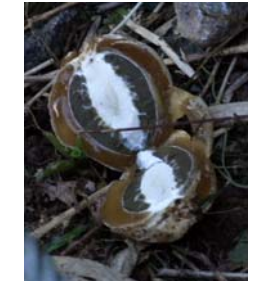
会員募集中!

2007年11月15日



2007年10月27日 簡保レクセンター跡地 自然観察会 大人11名、

秋晴れでしたが、風が強く、木々がざわざわ音をたてていました。10月末の土日はあちこちでイベントがあったようで、遅れて駆けつけてくださった方もいらっしゃいました。正門付近では、ジョウビタキ。冬の使者が早速私たちを出迎えてくれました。季節に関係なく見られるホオジロもしっかりスコープで観察できました。



見晴らし小径では、もうオオカマキリの卵囊がついていました。冬を越す卵、断熱効果抜群の泡に包まれているんでしょうね。

三国丘陵にほんの少ししか残っていないゲンノショウコ(画像は、はじけた実)★を丘に挿し木しました。柿本さんがきれいに土をかぶせてくださいました。来年花が咲いてくれるといいのですが。

藤田さんから卵のようなものが丘から下りる小径にあると情報をいただいております。前日に勝野さんがチェックしてくださいました。どうも菌類のようだったことでした。皆で観察しましたが、触るとなんだか芯のあるマシュマロのようでした。一つ失礼して持ち上げてみたら、小さな細い根のようなものがありました。辛島さんが小刀で真ん中から切ってくださいましたが、キノコの幼菌のようでした。こんな風に柄や傘の部分がしまわれていた



んですね。

さて、酒見さんが根を生やしてくださったハグロソウ※は、イヌビワ小径の暗い場所に挿し木しました。また、下の水溜まりの一部にコバノギボウシ☆の種をまきました。

水溜まりそばのイスノキの大きな虫瘤を見て吉木さんが「脱出口が空いていないね」と。この時期だったらもう羽化しているのでは?、と一つ中をのぞいてみました。中はカビのようなものがいっぱい、生きた虫はいませんでした。何がおこったのかわかりませんが、無事に羽化はできなかったようです。



後日談ですが、脱出口が空いていました。羽化です。吉木さんには即お知らせしました。

九州歴史資料館建設工事中の立ち入り・・・不可。

これまで何度も、福岡県の管財課、自然環境課、文化財保護課と交渉してきましたが、結局他の民間の使用者にも立ち入りを断っているし、たとえ工事が休みの土日であっても資材などをおいている手前安全確保ができないということで、入れないということになりました。大変残念です。

今のところ、ヨシノボリ溝(ウナデ)以南は工事関係者も触ることはないということですが、今後色んな人たちが出入りする上で、溝も含めた湿地帯(水溜まり)を埋めたりすることがないように、重ねて要請しました。また、私たちが入れないのであれば、きちんと福岡県でこれらのことを監視するようにお願いしました。できれば、埋め立て禁止の立て看板などを設置して欲しいと文化財保護課友池主任主事、及び自然環境課武末係長を通じて各課と協議するようにお願いしました。

ということで今度の観察会が簡保レクセンター跡地としての最後の観察会になります。最後ですので、ゆっくり楽しみたいと思います。尚、次のページにアカガエルの水溜まりの1年を簡単にまとめております。どうぞご覧下さい。

ブログより

三国丘陵の観察に新兵器登場です。自動撮影装置デジカメというそうです。仕掛け人はカチガラスさん。さて、どんな動物たちの姿がみられるでしょう。楽しみです。

詳しくはブログ、<http://mikunikyuryo.blog107.fc2.com/> 「新兵器導入」をご覧ください。



畳半畳の水たまり ～つながる命～

小郡市三沢の簡保レクセンター跡地の小さな水たまりをいくたびに覗く。夏、干からびかけるとタ立で湿気をとりもどす。雨量が多いと、テニスコート半分ほどの湿地になる。イトトンボの仲間やハラビロトンボなどが産卵しているが、強い日差しで再び畳半畳に。

秋、ヤゴが何かを捕食していた。晴天が続くと、アオコが目立つ。ミシコも沢山いる。



冬の雨の夜の翌日には二ホンアカガエルの卵塊が見つかる。多量に孵化するオタマジャクシは羽化の近い肉食性昆虫にとって貴重な蛋白源であろう。アメンボやヒメガムシなどもいて、巻き貝も底の落ち葉を這っている。



5月の連休の頃、干上がることが多くなる。幼体となったアカガエルもいるが、底に重なるように横たわった沢山のオタマジャクシは野鳥の餌にもなっている。足跡が沢山ついでおりイカルチドリが側にいたこともあるし、カラスが食べていたと散歩中の人から声がかかったこともある。



梅雨になりまた水がたまり、又マガエルなどが産卵する。湿地が広がり、側溝の水があふれると、スジエビなども住人となる。これらの住人もまた日干しになり、コオロギなどの雑食性昆虫に食べられたりする。土色をした小さなカ



エルは、無事に生き延びたものだ。

干上がって白くなったアオコにも上から何かを突き刺したような穴が空いている。嘴だろうか。このアオコは日よけがわり。はぐると中は湿っていて、黒々とした田んぼの土のようだった。もそもそと薄茶色のものが動いた。ケラの幼虫だった。



水たまりは、まさに生命の揺りかごである。

この文章は、「久留米の自然を守る会」の会誌、「久留米の自然」第98号に載せたものに、加筆及び、写真の追加をしたものです。九州歴史資料館の建設工事で、貴重な生態系の一部をになう浅い小さな水溜まりがなくならないことを祈り、載せることにしました。



キノボリトタテグモって何? トタテグモ科のクモで、松や杉、檜などの大木の地面に近い部分に巣をかけます。日が当たるような場所にはなく、湿気と薄暗い環境が必要のようです。巣は、いわゆるコガネグモのような空中にはるものとはちがって、ジグモの袋の巣を長さ2cmくらいに小さくしたようなものです。巣の奥は袋になって閉じていますが、反対側は開け閉めできるようになっています。これは、狩をするためということです。開け閉めできる扉は円扉で、その一カ所が固定されています。固定された部分を蝶番というようです。またこの円扉の表面は、苔や樹皮で擬そうされているので、を見つけるのはなれないと難しいそうです。私の場合は、坂を上っていた途中に大木があり、目の前に円扉が開いていたので、ラッキーでした。尚、丸窓の直径は、津古のもので7mm、西島のものは、1cm近くありました。

次回予定 11月24日(土) 9時30分集合 簡保レクセンター跡地 ゆっくりされる方お弁当をお持ち下さい。 **工事前に入れるのは、観察会としてこれが最後です。** 尚、14時から17時まで自然観察冊子作成の話し合いを光が丘公民館で行います。また、編集委員会のみ参加される方、場所が変わることもありますので、松永までご連絡下さい。 その次は、12月22日(土) 9時30分集合です。

発行元 三丘丘陵の自然を楽しむ会

連絡先 willard@mbc.ocn.ne.jp

編集協力 松下彩二・雅子、

勝野史雄、

写真協力 勝野史雄

写真・カット・文 まつながきよこ